

意味の反実在論は何を帰結するか

小山 悠 (Yu KOYAMA)

東京大学総合文化研究科博士課程

我々はしばしば言葉の意味を誤って理解している。たとえば、「ウィンナーコーヒー」はウィンナーソーセージ付コーヒーだと思っていたりする。このような誤りは、「ウィンナーコーヒー」の意味を正しく理解しているならば決して言わないようなことを言ってしまう状況で明らかになる。しかし、こういう状況に一生出会わないこともあるだろう。であれば、我々が意味を正しく理解しているつもりのどんな語についても、たまたま理解の誤りが明らかになる状況に今まで出くわさなかっただけで、ほんとうは誤った理解をしているのかもしれない。

たとえば、私が初めてアラスカに行き、ブタがいるのを見て「アラスカにもブタがいる」と言ったとする。そこにクリプキが『ウイトゲンシュタインのパラドックス』で描いた類の懐疑論者が現れて、次のように疑うとしよう。私は「ブタ」がブタを意味すると理解していたから、ブタを見て「ブタがいる」と言ったのだが、ほんとうは「ブタ」はブタではなくプラスを意味しているのかもしれない。(ただし、ここで「プラス」とは、アラスカ以外の場所でブタであるか、アラスカでカラスであるものを意味する。) そのときまで私はアラスカのブタについて何を言ったり聞いたりすることがなかった。だから、「ブタ」がブタを意味すると「誤って」私が理解していることが明らかになる機会がなかっただけで、ほんとうは「ブタ」はプラスを意味すると理解するのが正しいのだ。この正しい理解にしたがえば、私はブタを見ても「ブタがいる」と言うべきではなかったことになる。

このような懐疑論の言い分を認めるならば、我々が言葉の意味を正しく理解しているという保証は一切なくなるだろう。この懐疑論に答えるためには、懐疑論が既知の事柄としている「言葉の意味の理解の正しさは何によって決まるのか」を明らかにせねばならない。「ブタ」がブタを意味するという事実があって、その事実のとおり信じれば、それで「ブタ」の意味を正しく理解したことになる、というわけではない。意味の理解は事実の認識ではないのである(意味の反実在論)。ここで、今度は、先の懐疑論とは逆に、「ブタ」はプラスを意味すると私が理解しているとしよう。そして、私はアラスカでカラスを見て「アラスカにもブタがいる」と言ったとしよう。そして、そのカラスが飛ぶのを見て「アラスカのブタは空を飛ぶ!」と驚く。アラスカ以外では私が「ブタ」と呼ぶもの(プラス)が飛ぶのを見たことがなかったからである。ここで、私には二つの選択肢が開けている。(1) 私が「ブタ」と呼ぶべきだと思われるもの(カラス)が現れたので、それを「ブタ」と呼んでしまったが、私はそれを「ブタ」と呼んだのは誤りだった、なぜなら、「ブタ」の定義には空を飛ばないことが含まれているからだ、と考える。(2) 確かにほとんどの「ブタ」は空を飛ばないが、それは事実とそうなのであって、空を飛ばないということが「ブタ」の定義に含まれてい

るわけではない、だから、アラスカの「ブタ」は変わったブタであるかもしれないがそれを「ブタ」と呼ぶことには何の誤りもない、と考える。選択肢（１）と（２）では、「ブタ」が何を意味するか（何を「ブタ」と呼ぶか、「ブタ」の定義に何が含まれるか）について、私が正しい理解だとするものが違っている。（１）を選ぶならばカラスを「ブタ」と呼ぶのは正しいことに、（２）を選ぶならばそれは誤っていることになるからだ。この選択が私のプラグマティックな決定であって、何らかの事実の認識によって決まるものではないことは明らかだと思われる。何が意味の正しい理解なのかは我々の決定に存する。であれば、「ほんとうは我々の意味の理解は誤っているかもしれない」と疑う余地は生じえない。もちろん、（１）の場合のように我々は自分で自分の理解の誤りを正すことができる。しかし、我々の決定を超えた正しい理解があるわけではない。

とはいえ、もし（１）と（２）のどちらにするのか我々が決定するのだとすれば、結局、我々のすべての発言の真偽は我々の決定によって決まるのではないか、と思われるかもしれない。「アラスカにブタがいる」という先の私の発言の真偽を考えてみよう。もし私が（２）を選ぶならば、「ブタ」はカラスを意味するから、この発言は真である。もし私が（１）を選ぶならば、「ブタ」はカラスを意味しないから、私の発言は真だとはかぎらない。言うまでなく、あらゆる発言について同様のことがいえる。こうして、あらゆる発言について、その真偽は我々の決定に依存することになる。（意味の反実在論から全面的反実在論が帰結する。）これはまったく受け入れがたい結論である。

では、意味の反実在論がまちがっていたのだろうか。そう考える必要はない。むしろ、真偽が本来的に帰属するのは、すでに一定の意味に理解された記号だけだ、考えるべきだろう。まだどのような意味に理解すべきなのか決めていない記号の真偽を評価することはできない。記号が一定の意味で理解されていることは、その記号を使って何かを主張し、その主張の真偽を評価するといった言語活動が成立するための前提である。我々の言語活動は、まず一定の意味に記号を理解し、つぎにその記号を使って何かをする、という二つの段階から成っているわけではない。我々はここで次の二つの問題を区別しなくてはならない。ひとつは（a）アラスカのカラスを「ブタ」と呼ぶべきか否か、もうひとつは（b）アラスカのカラスはブタであるか否か、である。（a）は我々の決定によって決まる問題である。（b）は事実によって決まる問題である（もちろんカラスはブタではない）。注意すべきは、この二つは頭の中でしか区別できないという点である。アラスカのカラスは「ブタ」と呼ばれるべきではない、というのは意味についての決定である。アラスカのカラスはブタではない、というのは事実についての判断である。しかし、ここで意味についての決定と事実についての判断は現実の活動としてはぴったり重なっている。ただ、同じ活動を、意味についての決定と見ることも、事実についての判断と見ることもできる、というだけにすぎない。そして、意味が決定されていることを前提にしなくては、それを事実についての判断と見ることはできないのである。